No.18
2004. 3. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発　　行　特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任　丸谷士都子
■編　　集　広報部
■事 務 局　〒231-0032
横浜市中区不老町1-3-3
フェニックス関内2F
TEL　045-228-1575
FAX　045-228-1578
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp
http://homepage1.nifty.com/EarthTree

CONTENTS

●非戦とシンプルライフ　●森と共に暮らす村人たちに迫る開発の波　●支援地から　●シンプルライフキャンペーン
●ブランチから　●活動日誌　●小さな明かりを消さないで　●10年経ちました、古着で国際協力　●INFORMATION

「いのちを見つめるアート展」にて解説をする筆者

非戦とシンプルライフ

副理事長　廣瀬　康代

私にできること

地球の木はアメリカのアフガニスタンやイラクへの攻撃に対し「非戦」を訴えてきました。しかし私たちの願いもむなしく、戦闘はあちこちで続いています。そして日本政府はイラクへ人道支援として自衛隊の派遣を始めました。

私たちのまわりには、コンビニが24時間営業していたり、いたるところに自動販売機が置かれています。冷蔵庫・エアコン・テレビなど私たちの生活には便利な電気製品が溢れていますが、それらがない生活はもはや私たちには想像できません。

そんな私たちの豊かな暮らし（石油・石炭・天然ガスなどの化石燃料をふんだんに使う生活）が戦争を引き起こしていると考え、地球の木は私たちのライフスタイルを変えていくことを提案してきました。昨年は会員の皆様からシンプルライフの実践例を集め「Be　Simple」という冊子を作りました。さらに私にできることは何かないかと思い、省エネルギー普及指導委員の研修を受けることにしました。

リキまず電気の省エネ

その研修の中で興味を持ったのが「待機消費電力」のことでした。以前からテレビのスタンバイ状態の電力など気をつけているつもりでしたが、私が考えている以上に多くの電気製品に待機消費電力が流れていることがわかりました。多くの人が気付き、行動することによってエネルギーの消費が抑えられると思いました。「待機消費電力」とは電気製品を使っていない時にでもコンセントにプラグを差し込んでいるだけで消費されている電力のことを言います。明かりを消した時、蛍ののように赤や緑に光って見えます。

家庭の消費電力の約10%が待機消費電力だと言われています。電気料金では約9,800円/世帯・年で神奈川県の世帯数で計算すると一年間で約347億円です。

待機消費電力が一番大きいものはビデオデッキ（待機消費電力6.9W）年間1,380円の無駄です。また、エアコンの待機消費電力は年平均4.6W（920円）です（各社・各機種によって違いはあります）。

使わない時、長期出かける時、コンセントからプラグを抜く習慣をつけるとよいでしょう。ひとりで頑張ってリキむのではなく、みんなで少し意識しながらも苦痛ではなく、多くの人と続けられることが私たちに大切ではないでしょうか。そして、太陽エネルギーやその他の自然エネルギーを活用していくことも必要です。

一人4トンの石油を消費？

日本は、世界の人口の約2%、エネルギー消費量では約6%を占め、ひとり当たりのエネルギー消費量はヨーロッパと同程度で、世界平均の約3倍程度を消費しています、ひとり当たり1年で石油にして約4トン消費していることになります。日本ではその石油を100%輸入に頼っています。また、現在埋蔵されている石油は約50年で枯渇するだろうと言われています。今後も化石燃料全般のエネルギーを獲得する争いは続いていくでしょう、それと私たちの生活は無縁ではないようです。

豊かな私たちの生活が戦争・貧困・環境破壊とつながっている今、一人ひとりが生活を見直さないと、子どもや孫の世代にこの地球を引き継いでいけないのではないでしょうか。

ラオス調査報告

精霊林で村長さんの話を聞く

2003年12月6日～14日にラオスチーム3名がプロジェクト視察に行きました。調査3度目の飯田さんは首都ビエンチャンの変貌ぶりにとても驚きました。訪れた支援先の村の生活はほとんど変わっていなかったそうですが、暗かったタケークの街には街灯がともり、車やバイクで賑わい、国道沿いにある村には電気が引かれテレビも普及し始めていました。ラオスの村にも開発の波はすぐそこまで迫っているようです。

森と共に暮らす村人たちに迫る開発の波

丸谷士都子

日本国際ボランティアセンター（JVC）を通したラオスの支援は1991年に始まり、主に森林保全と自然農業に12年間支援を続けてきました。今年度は森林保全・自然農業に50万円の支援をしています。

現地訪問の目的

① これまでの成果を確かめ、継続について検討すること
② ラオス国内の開発の波が村人に与える影響を知ること
③ JVCの役割について理解を深めること
④ 村人や農林局の人たちに日本の森林について伝えること

タイ国境からメコン川をボートで5分、カムアン県のタケークという町に着きます。きらびやかなお寺や建物の建ち並ぶタイ側からラオス側を眺めると、見えるのは木々とごつごつした石灰岩の山々のみ。対照的な両岸の風景です。

カムアン県農林局を表敬訪問。副局長サヤブッ氏の話によると、県の森林は3つのゾーンに分けられています。雨水を吸収して水源の枯渇や洪水を防ぐための「保護林」、伐採量を設定して使う「利用林」、そしてユーカリやアカシアを植えている「植林地」。収穫はまだ一度のみで問題はないとのことでしたが、生長の早い樹木が今後生態系へ与える影響が気になります。実際、国道沿いに続く広大な植林地を目にしました。この木々はベトナムを経由し、木材チップとして日本に輸出されるのです。

JVCの中村さん、名村さん、県の担当者の案内で支援先18村の内、3村を訪れました。

木の実、薬草、沢がに、小動物を国道沿いで売る

ダットムアンカイ村　タケークから、がたがた道を約2時間。お寺での意見交換の後、森を歩きました。自給用の水田と野菜畑。後はすべて森から得ています。米不足の時のみ米を買う生活です。「外から買う食料は何ですか」と聞くと、村人はちょっと考え「塩だけだね」。国から村への土地森林委譲に伴い、1993年から森林保全の研修を始め、1995年に森林区分を行いました。悩みは人口増加で耕作地が足りないこと。確かに村には子どもがいっぱい。

ノンブー村　タケークから快適な13号線を車で30分。大きな声の村長カムサイさんが迎えてくれました。森の働きを研修で理解するようになり、保護林、利用林などの区分をすることで森林の使い方を知り、化学肥料と自然肥料の違いも学んだと自信たっぷり。こめ銀行が軌道に乗り、収益も出るようになりました。

共同農園を1999年にスタートしました。村から少し離れていて管理が難しかったこと、用水池の魚が育たないなど、思いどおりにはいきませんでした。現在も続けているのは当初の6分の１の世帯のみ。一方、近くにあるプンノイさんの畑は、研修で学んだことを実行した結果、様々な作物が育っていました。今後は意欲的な人をサポートし、成功例を作ってそれを広めていくことを計画しています。

ナボー村　山のふもとにある自然豊かな村です。村長が植林会社に土地を譲り、ユーカリの植林が行われました。村人は、労働力を提供したにもかかわらず賃金が支払われないことに怒り、フェンスを持ち去り、問題になりました。その後、会社が新しい提案をしてきても、村全体で話し合い、簡単にサインはしないと、失敗から多くを学びました。

「この村で自慢できることは何ですか？」私は、こう問いかけました。すると、「ここは私のふるさと。森がいっぱいある。ここではお金を使う必要がない」「水源から近い。水田や焼畑地がある。家族がいればどこでも生きていける」口々に思いのこもったことばが発せられました。森と暮らす人たちの誇りが伝わってきました。

素朴な村々から首都ビエンチャンに向かうと、急速な経済開発の波がひしひしと感じられました。巨大なナムグムダムによりできた湖は東京都の半分以上の面積。100以上の村と森が水の中に沈んだとのこと。新しいビルが次々と建つ都会のはずれにはゴミの山とそこに住み着く人びと。

カムアン県の村人がこのような変化にうまく対応できるように、森林を自分たちで管理すること、環境を保護しながら続けていける農業の知識や技術を伝えることがいかに大切か、ビエンチャンで初めて納得がいきました。このプロジェクトに地球の木が協力してきたことに大きな意義を感じました。これからもラオスの人たちと共に開発について考え、行動していきたいと思います。

ラオス人民民主共和国基礎データ

面　　積：23.7万平方km（本州とほぼ同じ広さ）
人　　口：552.6万人（2002年）
首　　都：ビエンチャン
民　　族：低地ラオ族（60%）、他に約60の少数民族
公 用 語：ラオス語
宗　　教：仏教（60%）、他に精霊信仰
政治体制：人民民主共和制
　　ラオス人民革命党による一党独裁
主要援助国：1位 日本　2位 ドイツ　3位 スウェーデン
対日貿易：日本からの輸入（自動車、鉄鋼製品）22.5億円
　　日本への輸出（木材）8.4億円
主要輸出品目：電力、木材、縫製品、コーヒー
貿易相手国：タイ、ベトナム、中国、日本
歴　　史：1893年　フランスの植民地となる
　　1945年　日本軍が一時的軍事支配
　　1953年　ラオス王国として独立
　　1960～1970年代　ベトナム戦争と並行し、内戦が激化
　　1975年　ラオス人民民主共和国成立

ラオスの村と日本の里山の未来は？

ラオスチーム　久保田由紀子

ラオスの村で、日本の里山の事を伝えたいと思いました。あちらは農業を生業としている人達、私は里山を守る市民活動をして3年程の人。あちらはラオス語、こちらは日本語。とりあえず、この不安には目をつぶって、今まで3年間の頭の中のまとめをしてみました。

日本の伝統的な里山と生活、農業の関わり方、それが今どう変わってきたか、その結果起きている事、各地で始まっているさまざまな試み、模造紙に書いたり、貼ったり、夏休み自由研究のようでした。ラオスに入る前の晩、バンコクのホテルで、同行の2人に聞いてもらいました。再び最初の不安が頭にひろがりました。翌日、心配はメコンの流れの中に、気分はすっかりアジアンで旅がはじまりました。

里山について説明する久保田さん

私達が訪ねた村の景色は、平地に高床式の家が寄り集まって建ち、田んぼが広がり、向こうに森、山は急峻で、岩肌も見せていました。ラオスの森はもっと熱帯雨林の猛々しいジャングルかと思いきや、意外にやさしいやわらかい感じの森でした。日本の里山は人の手が入らないと、アズマネササ、アオキ、シュロなど日陰でも茂る下草が繁茂し、木は常緑樹の厚い葉で森は暗くなり、更に葛などつる性植物が被いかぶさるような事になるのです。ラオスでは、この季節だったからでしょうか、保護林、保全林でも下草もか弱く、木も細め、中は木漏れ日が柔らかくもれ、明るい森でした。何十年か前の日本のように、村人はここで薪を拾い、水を汲み、薬草を採ります。朝起きて、自分が食べる物のために働き、日没とともに休む。足りない時は、森へ行き、木の実、沢蟹、ネズミなど小動物を採ります。こういうまっとうな暮らしをしている人間の健全さ、明るさ、迫力にたじろぎながら、持っていった日本の山、森、田、畑の写真を見せ、里山の話をしました。あまり情緒的にならないように、村の人は、この中の何に興味をもつのだろうかと考えながら。殺虫作用のある植物、森の中の祠、お墓の写真には身をのりだして見ていました。

遠からずくる近代化の波をどう迎え、乗りこなすのだろうか。ラオスの村と日本の里山は条件は違うけれど、同じアジア人として未来を考え、描いていきたいと思いました。

支援地から

フィリピンから

夢の実現をめざして

昨年10月8日から始まったエスペランサ農園の砂糖キビの収穫は今年の1月上旬に終了しました。最初に砂糖キビを搬入した砂糖工場では、元地主の裏工作により代金が支払ってもらえず、工場を変更するということがありましたが、その後は順調にいっています。

昨年11月28日にはエスペランサ農民組合委員長のリト・エスタマさんを横浜にお迎えし、交流と報告会を開催することができました。リトさんは自分たちが孤立していたら長い闘争を続けることができなかったこと、私たちの支援が農民組合を支えてくれたことを語ってくれました。しかしこれで一件落着というわけにはいかないのです。今回の収入でエスペランサ農民組合の受けた融資を返済すると、2004年の生産に回せる資金はわずかしか残りません。ということは2004年も融資を受けることが必要となります。基本的に大事なことは、世界市場に直結し投機的商品である砂糖にばかり頼らないということです。

リトさん

「カジノ資本主義」という言葉がありますが、ネグロス危機のきっかけも大地主制と砂糖の国際価格の暴落にありました。1980年から1985年の5年間でポンド当りの砂糖価格は7分の1に暴落しています。それと砂糖の生産サイクルが1年であることも零細農民にとっては問題です。またフィリピンでも貿易自由化により1990年から砂糖の輸入が始まっています。このような状況の中で農業での自立ということは簡単なことではありませんが、地場のマーケットを対象とし、生産の多様化をはかることはどうしても必要なことです。また化学肥料や農薬に頼らず健康的な農業を進めることも重要です。

昨年9月に行われたセブ島での農民交流・研修が好評で、第2回の交流・研修も11月に行われました。参加したモデル農家では研修の知識を生かして、にがうり棚を作ったり、今まで直まきにしていたにがうりを移植栽培に変えるなどして収量を増やしています。またセブ島から持ち帰ったさつま芋も大きく育っています。すでに米作りが始められていた農園では、セブ島での精米事業を参考にして自前の精米所を作り、その米を自分たちで売るという夢の実現を目指した計画を進めています。

これから始まる「家族型農家の経営基盤づくり」では、農民どうしの交流・研修を大切にし、3ヵ年の計画で目標とする農業による自立を目に見えるものにしていきます。そのために生産の多様化、家畜・養殖などを組み合わせた循環型農業、灌漑の整備、食品加工、販売網の開拓などに力を入れていきます。また農村女性の経済的自立を促す小規模ビジネスなども計画していますのでご期待下さい。

（フィリピンチーム　米林　大作）

2002年12月に始めた募金によるエスペランサ農園への支援は2004年2月をもって終了させて頂きました。募金総額357,348円。募金は日本ネグロス・キャンペーン委員会を通じてエスペランサ農民組合の人々の生活支援や裁判費用に充てられました。たくさんの方々のご協力ありがとうございました。

プロジェクト名　●ネグロス島ツブラン農場支援

カンボジアから

子どもたちがあぶない

チャイルドケアセンターでは、地球の木ほくぶからの支援金で購入した土地からの米の収穫も終わり、子どもたちは元気に学校の勉強やクメールの踊りの練習に励む毎日を送っています。そんな彼らに悲しいことが起こっています。それは現在アジアで猛威をふるっている鳥インフルエンザにより彼らの飼っていた鳥が全部死んでしまったのです。チャイルドケアセンターのあるトロス村でもたくさんの農家の地鶏が被害にあい心配していた矢先でした。人にもうつる可能性があるとのことなので、子どもたちや周囲の人たちの健康がとても気にかかります。

ところで今回は『*カンボジア市民フォーラム』10周年シンポジウムからの報告です。カンボジアでは1993年より小さい事件はありますが、おおむね平和が保たれています。しかし、急激な市場経済の導入や『援助の洪水』は、都市部と農村での経済格差を広げ、思ったようにはGNPは上がらず、国民の36%が貧困ラインより低い生活を強いられています。汚職と不処罰の悪習がいまだはびこっており、法の整備や選挙の公正・表現の自由などの確保が急務です。

国際子ども人権センターの報告によると、現在ベトナム、カンボジアの子どもたちが毎月400人から800人も、人身売買の被害にあっています。最近では低年齢化し、男の子も対象になっています。そして、インドネシア方面等へ連れて行かれる子どももあります。カンボジア国内でも取り締まりは行われていますが、仲介業者が警察とつながっていたりして、なかなか救出できていません。カンボジア国内にはこの問題に取り組み、子どもの保護、心身のケアを行っているNGOがいくつかあります。これらの団体では、子どもたちの長期滞在や生計を立てられるような技術の習得などに日本のODAの支援を望んでいます。インターネットの発達や観光客の増加などで、日本人が仲介業者として入っていた事実も明らかになっています。1999年に日本でも法律ができて、日本人も毎月のようにつかまっているそうです。現在の経済構造は農村をますます疲弊させ、たくさんの土地なし農民を生み出しています。日本も無関係とはいえないこの問題を日本側NGOも協力して明らかにし、国内外に知らせていこうと話し合いました。

（カンボジアチーム　小泉　恵子）

＊『カンボジア市民フォーラム』とは、カンボジアに関係する日本のNGO,市民、学者などのネットワークです。地球の木は、10年前の設立当初より加わっています。

米を収穫する子どもたち

●バッタンバン州のチャイルドケアセンター支援

ネパールから

成人識字率 100パーセントを目指して

昨年夏の和平交渉決裂後、マオイスト（毛沢東主義者）と政府軍との衝突が再燃し、ネパールの政情は相変わらず不安定です。このような社会情勢の中、民衆が力をつけ、情報に流されず、正しい判断力をもつことがますます求められます。

内戦のため中断されていた極西部カイラリ郡でのプロジェクトのうち、識字教室が3村で再開されました。デブラニ募金ですっかり有名になったデブラニの嫁ぎ先、ボンカタ村で2教室、デブラニの先生だったラクシュミの住むサンデパニ村とニムディ村で各々3教室。合計8教室が2月初旬からスタートしました。今回は、解放された元カマイヤ（債務労働者）も対象になっています。成人識字率100パーセントを達成したニムディ村のうわさを聞いて「自分たちにも支援してもらえないか」と、リーダーのアルジュンに依頼がきたそうです。カイラリ郡にはネパール語を話せない女性たちが多く、女性の識字率は15%。字が読めないため、だまされたり、借金をかかえる世帯が多いのです。

前回、好評だった野菜つくりトレーニングも実施されます。家庭の食生活が豊かになり余剰野菜を売って収入を得ることができます。自立した女性たちを生み出した裁縫トレーニングの効果調査も始まっています。調査結果は今後の支援に反映されます。

人材育成センターのあるカトマンドゥ近郊のラリトプールでもプロジェクトが展開されます。現社会状況により　活動が低迷しているNGOや市民グループを対象としたNGOリーダー育成トレーニング、協同組合をつくるためのトレーニング、将来地域活動の核となる青少年育成のためのトレーニングなど。　成果が楽しみですね。

（ネパールチーム　乳井京子）

●女性のための教育支援

シンプルライフキャンペーン

え!!シンプルなくらしが平和につながるの？

シンプルなくらしとは、まず自分のやりたい事は何なのか、的を絞ることだと思います。あれもこれもと欲張ると、結局はムダな動きが多く必要ないエネルギーを使うことになります。人の一生というライフスパンで考える時、もっとも効率の良い省エネ方法は、自分のやるべき事は何か、熟考し行動すること。これをせずしていくら電気を消し回っても結局は、ほとんど意味のない動きではないでしょうか？

日本人は本来、省エネ民族です。身体が大きく、エネルギー消費量の多いアメリカ人と比べれば、はるかにシンプルライフを送っていると言えます。本来持っている日本人の質素な部分を活かし、それぞれが人類という立場に立ち、世界を見る時、まさに省エネライフに直結していくのだと思います。

（三鷹市　棚田潤子さん）

ブランチから

西湖ブランチ

「いのちをみつめるアート展」に参加して

坂下まさみ

クリスマスをはさんだ12月23日～26日の4日間、平塚の美術館で開催された「いのちを見つめるアート展」に参加しました。

9.11以来世界がどんどん戦争へとつき進んでいくことに、何かしないではいられないという思いから、宮崎淳子さんとそれに共感した人たちがつくったグループ「湘南・海からの風」。

地球の木との出会いは横浜で開かれたピースコンサートでした。このアート展のテーマは、自分を大切にし、他の人も大切にする。そしてそれを身近なところから訴えていくということでした。平和な世界で共に暮らしたいという同じ思いから、地球の木も「シンプルライフが平和につながるんだ」ということをアピールすることになりました。

アート展の展示に参加する画家、造形家の方々に混ざって地球の木が何を表現できるか、とまどいと不安がありました。スタッフ会議で紆余曲折があったものの、地球の木はコーナーを教室に見たて、学校でお借りした机と椅子、擬似黒板を配置し、シンプルライフのパネル、夜の世界地図*(1)と世界の紛争地図、国別の石油の使用量の比較等を展示しました。そして、毎日15分間レクチャーとして、シンプルライフへの提案、（その内1日はネパールの毒のコップ*(2)のワーク）の時間が持てました。表現することで自分のいのちを見つめ、魂にふれる体験をするためのワークショップもあり、アート展ということもあっていつもとは違った方々に訴えることができたと思います。

＊（1）夜の世界地図：人工衛星から夜の地球をみると、日本列島はピッカピカ

＊（2）毒のコップのワーク：字の読めないことの恐ろしさを知るゲーム

湘南ブランチ

フィリピン調査報告会を開催

国分　純子

2月7日、茅ヶ崎駅近くの市民ギャラリーでフィリピン支援地調査報告会を開催、昨年の夏現地を訪れたフィリピンチームのメンバーの話をじかに聞き、

ネグロスの農民が土地を所有することの難しさ、農業で食べていくことの難しさなどがよく解りました。改めて、地球の木の会員であることの意義は大きいと思いました。お昼には薬膳・菊花ずしをみんなでいただき、ひと足早い春を味わいました。その後は「地球の木」を語ろうということで自由に意見交換をしました。こんな話し合いの場を少しずつ広げ、もっとたくさんの会員のみなさんに参加してもらえたらいいなと思いました。

活動日誌（12月～2月抜粋）

2003年

11月23日　韓国NGO「地球村わかち合い運動」が地球の木事務所訪問
11~26日　ソウル「南北コリアと日本のともだち展」
28日　FAOこども食糧会議　グッズ販売
30日　シャプラニール・全国キャラバン2003東京イベント「NGO・NPOの役割って何？　～バングラデシュ・ネパール・日本の現場で考えたこと～」　パネリスト参加

12月 5日　藤沢市立善行中学校　出前講座
6日　「クリスマスギフトで国際協力」（ゆめコープ）グッズ販売
6~14日　ラオスチーム現地調査
14日　「南北朝鮮との平和的解決を市民レベルで考える」　パネリスト参加
13~14日　カンボジア市民フォーラム　「カンボジア復興10年の光と影」
16日　鎌倉高等学校　出前講座
12月21日　WE講座講師「先輩NGOに学ぶ」（WE21ジャパンつるみ）
23~26日　「いのちをみつめるアート展」（WEST）

2004年

1月 7日　ラオス現地調査報告会
20日　WE講座講師「ネパールの家族ゲーム」（WE21ジャパンとつか）
25日　鶴見国際交流まつり（北部・とうぶ）
31日　「これからの国際理解教育を提案する！～グローバル教育と多文化共生教育をつなぐ～」教材・教具の展示
31日　「カンボジアの箱　学習会」JVC

2月 1日　生活クラブ「フォーラム・アソシエ」交流会
7日　ネパールプロジェクト学習会　（なんぶ）
11日　学習会「ラオス・川崎の里山を考える」（ラオスチーム）
19日　横浜市立茅ヶ崎台小学校教員研修「貿易ゲーム」
29日　港南国際交流協会ラウンジ祭り（なんぶ）

こんな活動も根づいています

「南北コリアと日本のともだち展」は、北東アジアの平和を願い、日本、韓国、北朝鮮、在日コリアンのこどもたちが「今は会えないけれど、まずは絵で交流しよう」と東京、ソウル、平壌、日本の各地で絵画展を開催し、友好のメッセージを交換する試みで、2000年からは、韓国のこどもたちとの交流も始まっています。3年目になる2003年7月の東京展には、平和を願う子どもたちの絵が日本全国から300点以上集まりました。

11月に開催された韓国展には、在日コリアンのこどもたちを含む12人の子どもたちが訪韓し、ワークショップや絵画展の開幕式に参加しました。地球の木からは「地球市民教育チーム」メンバーの金 恩貴さんが通訳兼引率として参加しました。

右上の人が金 恩貴さん

小さな明かりを消さないで

地球市民教育チーム　金 恩貴

今回、ソウルでの「南北コリアと日本のともだち展」のお手伝いをさせていただきました。

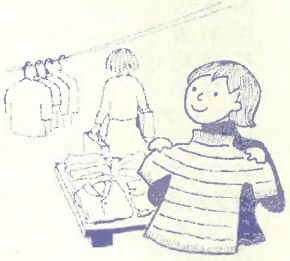
この絵画展は、子供たちが、いつかきっと会える未来の友達に向けてメッセージを送るための絵画展です。朝鮮半島が南北に分断されていて、会いたくても会えない家族や友達がそこにいる。私にも北朝鮮に帰国した叔母が3人と、会ったことのない従兄弟がたくさんいます。みんなに会いたい。いつか会える日が来るのかしら…。そんな将来に対するみんなの希望を託した絵画展です。そして、私にとってはもう、一つ、違った意味を持つものでもありました。それは、日本人の中にも、北朝鮮の市民や在日コリアンを普通の人間として平等に見てくれる人がいる。そう確認することによって、在日コリアンとして日本で生きていける勇気を分けてもらう場でもあったのです。

一昨年の拉致問題から始まり、日本のマスコミでは毎日のように、北朝鮮についての興味本位な報道が続き北朝鮮の市民はもちろん、多くの在日コリアンがこの一方的な報道に傷ついています。拉致は、悪いことです。でも、その理由や歴史について、考える余地は全くないのでしょうか。ひとつの国の一握りの人が悪いことをしたら、たとえその国の民が飢えに苦しんでいたとしても、それを支援することが、間違っていることなのでしょうか。その一部の人たちの行為のために、民族のすべてが、後ろ指をさされなくてはいけないのでしょうか。　この展示会は、これらの問いに対する小さな答えを私に示してくれました。ほんの一握りでも、同じ地球市民として向きあってくれる人たちがいる。この展示会の存在は、多くの在日コリアンや北朝鮮に住む人々を勇気付ける力を持っています。どうか、この小さな明かりを消さないで欲しい。そう祈っています。

地球の木の皆様には、大変貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

「南北コリアと日本のともだち展」ホームページ
http://www.jca.apc.org/~s-tera/friends/index.html

10年経ちました、古着で国際協力



副代表の乳井京子さんがファイバーリサイクル泉谷で古着を売って得た収益を地球の木の支援金に充てる活動を始めて10年になります。なんぶの磯子で12月に開催されたガレージセールに、地球の木でいろいろ手伝ってくれている山本みゆ紀さんが参加し、報告してくれました。

「ホームステイで引き受けたネパールのニルマラさんとの出会いがきっかけでした。10万円で学校が2校建つことを知り、回収した古着をガレージセールで売って、その収益を支援に充てられないかと考えました。3回のガレージセールで目標の10万円となり、ネパールの識字教室への支援が始まりました。以来10年、古着を回収し、ガレージセールを年4回行ってきました。これまでの総収益は200万円を超え、地球の木のネパール支援プロジェクトのほか、阪神大震災など被災地支援や障害を持つ人の支援に使われてきました。」と、乳井さん。

古着を提供してくれる人、ガレージセールを手伝ってくれる人、古着を買ってくれる人、良いことやってるね、といつもカンパしてくれる近所の人たち、大勢の人に支えられているんですね。

INFORMATION

カレンダー報告
今年度もありがとう

写真家、長倉洋海氏によるアフガニスタンの子どもたちの表情を生き生きと映し出した2004年版地球の木カレンダーは、好評のうちに早々と完売することができました。たくさんの方々にご協力をいただき、ありがとうございました。販売部数は1,310部　収益は51万円でした。必要経費を差し引き、地球の木の各支援地に送られます。

市民活動フェア2004

日　時　　3月13日(土)、14日(日)
場　所　　かながわ県民サポートセンター

地球の木は次のように参加します。

●ブース展示　3月13日(土)　10：00～16：00
活動紹介および作りたてのおいしいチヂミ(韓国のお好み焼き)グッズの販売（10階）

●フィリピン・ネグロス島ってどんなとこ？
12：00～13：00　1501号室(15階)

●わくわくワークショップ：NEWマジカルバナナ
13：30～15：00　1501号室(15階)

あーすフェスタかながわ2004

日　時　　5月15日（土）、16日（日）
場　所　　地球市民かながわプラザ（JR本郷台駅前）
主　催　　あーすフェスタかながわ2004実行委員会

テーマ：みんなで育てる多文化共生
～話してみなけりゃ、はじまらない！～

外国籍県民、NGO、ボランティアが力を合わせてつくりあげるおまつり。
世界屋台村、ワールド・バザール、民族舞踊など盛りだくさん。

総会のおしらせ

日　時　　5月29日(土)13：00～16：00
場　所　　かながわ県民サポートセンター15階
（横浜駅西口三越そば）

多くの方の出席をお待ちしています。
詳細は同封のちらしをごらん下さい。

地球の木とは、
地球上のすべての人々が自然と共存し、人が人らしくあたりまえに生きていくことが出来るように、地域と地域を結ぶ国際協力活動を行ない、相互理解を深める社会教育活動を通して、お互いの人権を尊重し、それぞれが自立した生き方を創造することを目的としています。

補助教材「NEWマジカルバナナ」CD-ROM発売のお知らせ

地球の木オリジナル開発教育教材の「NEWマジカルバナナ」は昨年末の発売以来、分かりやすく、使いやすくなったとご好評をいただいております。

この度、補助教材としてクイズや解答のグラフ、バナナの資料写真、撮りためたフィリピンの写真70数枚を収録したCD-ROMを製作いたしました。　パソコンやプロジェクターを通してフィリピンの農村のイメージ作りに、またプリントアウトしてフォトランゲージの写真にと、お役立て下さい。

内　容
◆バナナクイズ・フィリピンクイズ
問題・解答・グラフ
◆バナナ村の地図と風景
◆フィリピンのくらし
◆食
◆バナナいろいろ
◆子どものくらし　一枚1,000円

地球のステージ

日　時　　4月3日(土) 13：00開場　13：30開演
場　所　　藤沢市民会館小ホール
主　催　　地球のステージ応援団・湘南

音楽と語りと映像で構成されるステージ。
問い合わせ　　國分　TEL.0467-85-1009

ありがとうございました

募金者リスト　2003年9月～　募金総額 433,000円
(エスペランサ：148,500円　デブラニ：156,500円　カンボジア：128,000円)

延吉鏡子	浜本久美子	中嶋洋子	池田千佳子
井上知子	鈴木登志子	伊藤せつ子	杉本恵美子
岡本明子	島田真美	原田悦子	滝口みち
八鍬スミ	水越蕗子	山崎文子	向井しづ
唐見純子	小林真由美	加藤広子	西岡喜子
服部るり子	安田恵子	片木康子	小林　隆
森本佳子	吉川真紗子	長澤紀子	扇谷智恵子
三橋洋子	山本通子	藤井郁子	本田まり子
藤田三津子	斉藤　敏	岩永みず代	中里ゆかり
伊藤信子	山下むつ子	島村祥子	柳田恵子
松沢明彦	尾藤尚美	寺田悦子	守井百合子
上野ひろみ	高橋由美子	浜辺美英子	丹澤厚子
森　桂子	早坂登美子	山本弘子	細井眞理子
丸山みゆき	大野優子	庄司富士子	蟹沢多美江
細谷洋子	青木和枝	植波敦子	黒丸幸子
大森正子	三毛ふみの	増田妙子	飯山美香
久次米恵子	比嘉公子	田中いく子	岡倉みづ江
酒井智恵子	浅利寛子	下室一枝	木本秀一
永田知恵子	木村節子	乗松寿代	本田まり子
対馬芳子	田中洋子	松田澄子	ケナウブ由美子
谷岡美佐子	豊田由紀子	久保田美代子	

寄付者　2003年9月～　総額 165,000円
鈴木修子　他1名、　ファイバーリサイクル泉谷

本誌は古紙100％の再生紙を使用しています。